国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

第二　ふち衣

明治十三年購求

一　けつ寺貞親王御子なりしかども法皇に成給ひ
し御門の法皇安徳院
ひけるぶんにてまつせ給
まいらせ給ひしかども
まもなく位をすてゝ世をのがれ給ひ
しかばいとゞ世をのがれ
きたりしとぞ
ばゝのさはりあるべきにぶそく

ぞうあるおんすなわち。遠御ちあり。女房のうち
ぶりのり。ぶりーそうこのあまもあのりて。鈍
を入さくまつぶべきぶを。をのくようぬてさふ
らられよりのあとかくぶれたいやーうお
ぶえくえよかりすくきれどいりでりはなどのこ
とあんとばーえよりでーはれよりはぐーとさ
ぶおろーはひくこれよのはのそんいちちくく
ぬるちーて相ーさまへ。ちよこのこれいで
さくく一院のはそういこれきあくよはとへはな
ぬまたぬをのづーちふされなどはへるもせ
よちーへるれくさりぬぐさえをりーまさ

ぬふよりおりまりりをきてあくかの入道の浄
のの法号院の法事十になりはをと兼久二年七月九日ふ
ーふ信よはけあてまつぶちれ兼とは太上天皇に
ふーさてまつりく法皇ときあいーめであく
よこさあのはさいよひおくーけら交ありそんわ
まて信よはの世はへふあめーー光仁天皇よりのちに
きえそえくーかりつおよめつーるめでーーぶれ
ちりとふは帰信。あくふとーー自覚應元年正月三日は
元服ーはよはのこれ義仁とやーはのーちえるものめり
ーるあてよそおりーあとはは母基家中納言なむ
をあふ白川院とは記。兼実のをとど又摂政よりを

うて世をひろくぷぐ法ぶどきたのつまふもぷまく
よひきぬてたる世をわりしぷとし十月廿二日
法皇うくれさせ給ひぬまぷぷ天下ぷれくろこわるりぬ
う一条院のゆくすまてまつ殿きひとあるはやどにいと
いとうあくれすうたるゆたなりおん門の空よ
て癒せてれ給ひくゆ。尊号おどのたるなよ殿ぷ
母后 東一条院 亀山さかぷ北殿すまぬゆくぷとんぷそくの
まきるうとぷきをぷおぷるげくぷぷうぷ橋
政慶 殿京極 ひめぎぎ ひ殿ぷてものをおくんぷうの道よ
もいとかりてうわくてせ給ぷぷ大うさわくぬうう
ちめやうにをるれ殿ぷ上てぷうれきをとも
やすくもくさせ給いぷぷあとなるもかぷりなれ
極とぷきうり給ぷまどぷおうくぷさそて給ぷ母
ぷくぷおりうすまでうもれうたてあとぷ濃
の院もうぷまうさ殿ぷぷ中よぷおんぷ思ぷ
ぷのくさせ給ひきぷのと思ぷ殿ぷ侍わうきのちぷ侍
みぷうものとおこおぷぷくぷぷぷくきぷと
ゆておくくぷくはうまうわきる女
房ぷぷにおりぷ井うまけぷりぷりおくれ
なるる侍ぷうそこをやしてぷ十月一日のうろ殿ぷる
ぷぷ乃御ぷをきてまつりぷぷまぷ殿ぷよ
おりひぷるこうをぷはうあ我も人ぷ

乃ち御あとあとに命じ給ふ
又はてあしのはのごとくよびてまれなる
ものや
きえうめる命そはしれぬ身なれ
あるもやうのこはうけぬらさりと
はてうはのりんてきをめをろくあるちぎりぶに
あるかとらのあいきたあさやかぢばりの
はちあるのやにくすぐってはんとぷろうけ
なーぢうれくあまくれく身應もうらるぷ元仁
嘉禄なるごのかーえばじあるかりて寛喜元
年よりありぬぷやぐふ光明峯寺殿道家又関白めて
おくしぢのはむとと先女院よ海のりおよ世中めで
きくはあやうりぢあきよりさたふ三条おきお
ぬぐ房の形光海のりおひさくきさたぐちあるぷい
乃ーうはめきおひーをーのけくおれ後家
寅のはむとぷまぐすぐおくあくてあするまのや
おおるよきぢあきはいくはばくえあてご条后の
うや浄東るとうやりあるりくうてはおるぷは
せうそこのこはあるびとのふちかふひなぐ
ーて世中すふあじるおびされすぐぷちすぐふ
后ぐらいありつるとちれ後栖禄うりおひて今
乃峯後道家東山家なりかうおひめきぢぐ又姫君入宿

ありくぐりて北の方に立ちぬべつしきぶ
ものの上をあれどもそなたにうかがひしれども
をあらもしるはこれ人なるべきもさてひとりぬけ
てうちばかりくゆるとかくしかぬるちもそき
といひしるめるかのむかしはものくゐ院号ある
て三条殿乃局なる安嘉門院中のあびまのりをも
一殿の女御なるそうつの乃院とそでまをしまとと
めしるとこそ一をへはかからは北殿もこの
あらくはくはるかぶこあるとて内侍
つくにた一さくまりをへぬかーど二年七月実
仏ぶ御山の御教実のはくはくはつりまく行へ

あるものの御身なる大殿として后宮乃はあやまきべ田
ひかりをなんおとりきよばるもさんのうん
ちうへをはるを海あめ形さはがあるおがまの将軍
山乃ぶ次ぶこ年でれたちやうやるぶ利尊仁和
ぶ北はむろぶれあの殿乃きたあちをてあはるれへ
天下いまるぶ海ぶるへくあうんくうり。伊と
ようそうくはくくしまきて。内乃はとの井下当
とふはひるうちけきみてひをへで関白殿つざく
乃はるどもく大臣なるをそぶりりはあるよたく
むるのしをひくぐ世乃まりるあどこるくうまの
ぶ北かはは公殿のはくぐれはむすめなきぶまして

世乃ちをもくなびきさすてまつ敷さ海ぷとやじごと
ちぷまとやうれと十百十一百あとの流くれ
さ移給ひぬぷとあくれよはつれさ給事かぷまて
ゐ流ぷ世がされ者きぶぷぐ打つ波給ひよそ
おくく拙とのこれがくぷ・くをせそなて
せ給ひきれぷ了あぶこやことを給らんぜぶ城
ゆるゐこうれしきとぞきろきぷまて
きこめるげる巣明門院いさ海くれうれる
とんくくなぷあぶ流ゆるゐのちろと海
きぷ又のくおゐじ世とぶかり給ひある給ちを
ふかいくれかれさりぷどちさ給ゆるとくいゐ

あぶしおろおくはとどろりあをを記さた
がてそまてめはくむ者ゆる給度ゆよくれち
おくさ給てたこやう什拙とぷ者へ人乃まいくせて
者給ゆしぷ海ちくふかひろるを給より者
そこ女院乃ぷ世うそこなと流ひとくよりきて
めくれたるぷみくうあくくれまてぷめをきり ゐる
ゐくちし給ふ女隆の二位乃ひとめぷこざい相と世
えくハぷをのづくけちくぷ給らんどゐまきるま
やぷくまりこに思ゐしのつまて御服なくくろを
そ給ける者

くしこみまゐまくわれい者てろを

屋うくはらくへきかとてなんのかきま
おとしもちられくまれく。貞永元年よりなり
定家中納言うけさまはりて撰集せさせありつるとき
のかとは門はりき殺給へきさしきこゆきはりや
はかくとく十月二日そうせられ名歌一と殺乃うりま
そうをしられるひとありかかるくこと殺。新勅撰とやう毎。
元久よ新古今いくきてけらなどあく世乃ものひれ
人あるよ文新の家らはぐれさるぷのうつの事
あどはぐめくくもとりけるとやさてはかり二日
ありけ世殺ばまやとはりれよりくありうれ。
つそけ二月なの文乃はも
ふ一はるのできる

ゆうはぐて左子にあ殺ひしぞうきしの
人乃ちさかはこは社兼久乃癒事乃ぷまれ殺
殺とひとしる婦ふかは殺へ
しとなるいはりくもはれ殺そけ七日
やうてそんがうありぱなやこあ成をこうびあるこ
世もこれかれすこのこうせばりは天角ん毛きち
ちひりまくてはうきはぐぷつくしこはりれ
角うまきはいくはれもはんとはいもさうく
角ぷ今上いこさいまるなせ殺ぷおさまりきる殺
のはのそけあさうてぐうこれ十者乃あるま
はぐまり殺ぷはゆくしきすでされの世殺る

しきたりなりなり。むかし近清院三。六条院こと
ごとはきたりてりしいづまをいとまうゆゆあ。す
めしなり。寛院殿のせいとやうあるかくまいばしてう
あてまつる。十二月廿日はそくせいあとをくれてぬ
きばめでくてうりぬ中えもはの事ふな
やさせひく。はいあつしうれうまんを院を
いとぶはきすあくあがなびくぶ月のころ年号
あくまは天福といあるべしそれおあしあ
中宮色信さりはひくぶ。ちうるれ門院とそいの西
野くぶとくも又きいあくびなやもせはくべめで
さそこはるれすずろとせはくべきよくとぶ世中め
でやくきそゆぶまりとくあるよくれおひあくしを
まぶれよりのくまるぶまてそのやどちくさりく
そ夫の下やとれそくあくぶ山くてくしくあ海く
思いのり初ぎきちつげとそぶ地乃まこうくていん
くくはさあくしは井よ九月十八日よおくきさせのば
ぬそのりどれいみぶさをくとくれぬ夏くぶあと
世出よたくくせはぶるくきくめうつくけおてさ
くりすくれ乃はすぶくおとき露ときそそて給
ひぬふいそんくあくあ夏うあ色あげくはぶくよさ海の
野くとものつぶさくぶ院よはちくぬこんぶきやう断
給ときそゆるぶ定部中納言乃ひきめありぶひえん

ぼうさまも京ちうはうまつぼくにあり事もかぎ
りなく思ひしづまりて御ぜんにおぼしめしうあ
きれる事なりぐんぬとくあるべきまて
あるべしさはうはうのやうとそひけとも
さてさてしさはなくはちめうなるまき
たう代乃御毎右めくれりつまこの天下これをか
ま、こそめふ屋つまぬぬのはあげきよりちく院さま
ぬこまさせ給ひてくぐちうそうはんぐ後さま
はらんしいおくらすくてぐ月はもしせ給へだ法
ぜんともいとうは光ぐくぬやまちくばまるくつる
のくしおくすしおんやうじまりはくとぬ下

はうの武乃ちうまりぬ文年号かてまぬ文暦元年とのの
新久の嫁帝十七よりぬ給つるぬ出月廿日ふらせ
給ひぬいとわろはぐぐのいとくだうのてはは
法ぐしありしぬさあるそうちつぎあしれなる
事とも成きこうめしあげ、るぬぬぬどよいまし
てうるあるあるとおぐぬやされぬこのはさしつぎの文
なる成おのしまはぬさぬめいの門院乃ちひそまつ
ら世給ありぬ、いひまろうわどゆ院のはるやこ日こ
よりくあるせ給ぬくぬ月六日ひとあるあるうあ
せ給ひぬ世乃おりしまておりしますべきあとのぬく
あへなる紀はありさあくちおりしなるきこゆるもなの

先ありぬべきことなれども上もあぢやうふかくしり給ふ
ものゝらをまはふうつくしうやさしくおぼしてどうちよ
ニだうわやおまへせたてまつりぬべかりけるほどに
ほのぼのとなどうるさやまいとも絶あり。さまどくしかく涙
ぬるものよ清涼殿のくらいとあるべくしうれつまはせ。
世人のおもしきことゆかさ海うちありぬべきくれさし
どくふくちどもあるも後堀川院とぞ申さるる。古えの入
道殿てあふとぢとぞ人くりかさねくアやうあむさ
ニ〻せ海でよおりん寺とぞ申くしく格〻
とこそ人おりて亀ぞ殿契ぞかあくれさもいとの
ものくらうん御禊大葬會なぐさいとぐのびぬ殿

おくるものこもぞうぢ紀もくぶれなるもやことを後さ
も過くも涙ようきしづこてそとぐ殿ひをおぼ
殿ぐ紀くのこ世中ちうぐ天変もおきりいかや
あて学〻しきやうあまぐば又年号つりて嘉禎元
年といふ国こやニ月乃もも忍はるよりわ構政殿
のりまくうれおりくまづひ給て古院乃法位の程より大夏の
法殿つりまて関白とやしぐ殿つあるれくおりあ海
ちばぢろの摂政殿とやなるべぢかちもんで
つもめでさくおりぢるおいとあへなくうせ給ひぬ
だ大変乃はるびきさくん殿れ。世六よでなる
給ひきおいとかありまるまち君あるまめ

一結ひとをぴさん費のこと部とくへよくこてくこ中さし結
ゐてう接設あも大厳さちうてりあと結ひぬがくくこ三
あひすつりこくに結あるあ結ひぬるやぬ政百乃法
ききんはくの乃おとくあきてばぬ代奏と部くつまて世き
はくくはもくに結のきのくなるべ。あとくぞは多どを
あくなりあきべぬくよありくく御禊大業會をこ部
くくに。海くめでさくくもあくれあも多くくある多
このるすどもどのるふはくくへきくこめして隠殺りは
あさ海ーのやくれはりやとはよいひよくへてをつ
きせぬはるびきぐくのたこ三きりそぬくさあよいあお
くあきあくあくて。三部結のくちふのこそは四を

のべきれ。あこくもあまりよはまくく髪とはっけくこと
ぬせばおくれよわとれでくく慈きこゆるむくれ人へ
びこ。我もくくとさてまりけきはとけきくよおは
さくくあまりよ方はくく邦ゴてはんぜられり
くりぬ隆乃二信もいまくでいけか四ひいでよおれく
ぶゆとあくれよかくけるくくぬとくへくれくる結
もあくくりぞやりあいめてまくくせくれぬぜくれ
秀能さあやくくんぶれのくくちがくら社結くてかく
ありりるくもぬ乗とぐいのひけかぬきくもはそびの
はくこの合くりめせばのまはくくよそれくこのるすこを
ぬを四ひいづくめぬきいのくすくはくでったかくう？

をぶかとて左御製

人まつ浦うはりてあらぬ花ぬすま
むしゝ有しの山のをゝ

右兼隆乃二位

あらをまくはりひそめきんはくむ
山とゝさくなりもつれまて

秀能

わさのいやうゝ浦のけさしゝへや
たゆうふかよ行きのはりする
山ゝといたいして又たこせや
行もあまくされくんせのやと井

もちんあ〳〵まてのうやはゝ一首

右兼隆

さ鶴〳〵はやゆうんあ浦の山さや波
はりひやうゝをすむしちうこの
波室まつゝ判のあとゝとゝせたまへうゝのまゝ
見あの浦とはりむ〳〵むはりハゝ〳〵久しくすま
て思ひいでんいまゝすゝ心ばゝ姫くやとてゞの
たうゝとうちとけあさせ給へゝ〳〵ゝあれはやゝ
きはるゆなあわかやうけたうれゝごゝ又ハ行ゝ浦公
の五つゝあすぐふまぶゝりて
あゝ元のはのでゝり

我なすらうとみてくめる所のうへは
あさるはりうおりうのりまつ
ゆうさつはいめるいそれ草よりさき
ゆくすみてくくもくれ来
おはうしにすませひくく十七年はりまやあり
くん延元年といふ二月廿二日六そうしてうくれ
させたひぬいまてびゑにゆんのはのごーあ
うまーー猶ぢ井はむあーーやこたひめーゆ
とかくでまあくあくれるなるけるき世も今はら
ひらーぢりたみすてきいのさうよかーさてまり
らもむげよくどくれるいびてきはありさはいを
あくれるあん法華堂とはひーー小西のペ道
ーて法ともかさあーひーーそくびようけくてまり
ようく交まるひりりけかぢくく大原の法華堂と
ゆのまもむーのはくれ西おくくこまのきくよる世
法れあるあてぢはめたーはの法華堂よりあ
めいの院のはくさあくぢ院ゆはくはかくめくり
ーこれ世後とくくされくりぢまのきいまでも世
法ひけかくりれはすくかどをがくこよのまさ法く
ーあくれるかくーけかくぢくくぢくくてまつる法
ひくくれあるーーぢはめくさくくひくく院とはくく法
くくされそりきれどぢはりーー世のはあくはし

なるようにとて仁治乃ころぞ後鳥羽とゝ法ゝに
よりしるしさ拾ま為わしなり

第四　三神山

はてしもぎん大納言みちゝゝ乃あがりしてまつて
きー　河内の守ぎんゝゝかとあひ給まくりはんゝゝ
をもいやきやうまくにばかりもいとう新ー
ゝくけゝくやひごとなれはあまたばかりべて
世びくもいゝあるゝし紀事よりもひやし事あり
大納言大人麿仁のころう殿ありしばいよくさんま
はゝうまつるかんもあくぶんばそばまてあるまり
としもなくかつひくおりまたもべさろく
あびきなりあがきばをしはゝちかんゝどよ
内大臣乃ちゝ拾はるよ。掌相乃申ねこちひまと

てぶつ　こゝろうゝ　ゆゝしく　人の　はじめ　すゝめ　ありて　ゆき　さへの
くれ　ゆき　ひゝ　ゝ　ばさの　相の　はゝ　かゝ　ゝ　姫君　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
のこれ　やう　ゝ　て　けゝ　こゝ　この　秋　迦佛　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
御門　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ぞ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
と　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
や　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

くゝ　まゝ　ゝ　ゝ　嚴明門院　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

まの〳〵あまたばいと後くしくれんぱちみてご食の文
のさはめもあまりあまりまでどばかりとりはさるもあり城
奥寺はた文僧正真性ときこゆる法華ゆかりとかたらひゃ
法ひろれいさやうよおぼして女院めもとのめのと申さ
殿法ひけ命をびとあるまゆびきゆとのこいさめゆえ
させ給ふのみはてろ文のうちの文のえく石清水乃命
し後よあうてさせ給ひばれんじものこふし給ひ
てずうまどろどせ給ふまゆふ神殿乃うちよ接業
ちうげこてびあ〳〵あるとびとあるやうよけさうた
ゆあくうちとむしいたりときてばんじあけ
こうれびかげこのそうすこうるまあるびとはりと

びさやうおてらと称さびびうりぶみえ法る法数を
法とあやしくおびさあまどくあものるまあ法
とすれくもあまというちくはがくもんとそせる殿
法ふやもうりぬぎれもじめをなへてなと
くよはあるあ、この身のいてみおどんゆきて
りげなるぶむ月の出日より酒はよきいなるぬ法
事ようでゼ日のせちゑめもは懐ものせ法りはだぶ
とうくしくくくおりあへるよ九日のあり
きうれさせ法ひあとてのくきりあへぶこの法ま
ともいはりわ殿しこれ人あされまどひくゆく
酒ぶふいくちとと女御ものまご童あそびの法法

りてなるおぼえ法師くむまきせ給へるありしい
とうとていみじくなれいうちまゐりくむして弁給へる。
ひとわさなげふらうあ。ぱ大夫乃はかのうちかりひ
やしまべ。ぱせうやたち大夫ぱいへの者も酔上。給へ御
くぐはの門のおれ。ぱかどまてさいしまでは出あて
えのきりてあ。くくさせ給ひけるおいえそこくむ
らかりみつぱかうちうんうたかをくへまりかりを
なすぱくれこあうあ。きぱるすぐはうちつぎめう
をぐりかもこうのとあはさうくまくまぐこそてこ
せ給えあ。ぱるけきぐるのはまりまやとそ世人と
ぱぐめれけるぱなやうんはしじめをあべてかすう

きまくぱおまりいくけかるかぱ御はまりそこおつ
かるかをきれとぐぱまきぱつぎもおりまるぐ
又ぱくあうの文おどもまくせ給くひぱ世ありい
よなりゆうんどるかうもだりあくかぱまあわ
さてしもやらすてあ。まくへそぱきやりけるぱ侍軍を
大数乃はるぱまは大納言殿ときこえぱうし殿乃殿
又よのぐりうさるうし紫野紅房と一ぱりて
かういう殿ぱくりあどくてゆくるうどりを
れかぱ。京まりはくまうしまとこのへはなかまるむ
ぱどうきぐぱうひかうしもくきくよいやあ
さあ。ぱちとくあれあくひそのむ。海よ

を為して祇園はじめたく、ぶらぶらとあるかせらるるそく
ゝとそなりけるぞのかどを過ぎまはいとうひさ
の事どもんのゐきくいむまろ、修験院のあるち
まやなゝしまくあまばゝ陰形門院のをはんときめ紀
して間くくちれはしう升形ゝ結ゝ兼明門院も
きしやおどさ海ゝはいのもしゝ結ゝあづまのはう部
交およゝうしさしけの日いあ女院より白川り
人とをくぶつこへうまいれとりんをゝまけるそこ
とりよきぶいよゝ月西へきまなれどものゝ元
なれきさあわゆるわぶそうゝとぎいりくらすげ
ゝてゝくゝ心ぶゝてゝ海ゝれくゝ城外ゝゝかと

いのこ象ゝよゝうちいでゝ兼明門院のおくゝ
ますゝる池をいびくゝとゝ院よりそゝれさ
る青侍ゝいやあやゝしげ形るゝもひられで。
きくんゝらつゝとをわはえあぶゝくとゝまれ
お御門殿へまゝりそれど門をむゝはゝかゝあ
とびゝをさびつれぶゝら祇くゝらてあぶりけるとゝ
うどうゝとをゝくゝせるゝ内よまゝりて鬼
まいせばゝりゝ兼姫くあ風さ菅のこむゝ面
わゝ殿ゝりはゝはこゝ院ものをゝくゝのかゝ
るあゝもゝわゝ。お通宗寧桐中将乃はをゝ殺る
ゝゝあまゝゝ。宣通のゝぶゝりぶゝあゝ

をはつりて事をやとり男ひとくぶなへとめるこはう
ーー事をしてはつりてひの行ひきるぶ中門よりのぞく
あいめんーー給ふよりかげをきわとのまれよりかーー
まりてぞ給りをは。河陸浪乃御位よりとりて
いでぬ院の中北人くよりて愛れくちーーてあるそのの
りまーーひきを仁治三年正月十九日あんの事なり
世人のうちされたーー給れあるーーぞーーやーーあ
るーーふまいりのどよ馬車のひだれたりく世のをとあ
ゑとぞはしー愛ーはあーー海ーーゆーーく拍あり
さ海べーーー乃日愛ーてはぞ事んーーてせーー給ふひさひ
きーーた大臣さのまのり給ふぞーーの歌弁定嗣ーーう

まりーーをぞはいーーあ邦仁御とーーかーーそれ和やが
て冷泉までーーー

なのみとなすくやくこそなりけるなれ。ゆゑ
開山はひじりの名をそでにうかべられあま
きこの。又人の夢のあとの門くれさせたひてのち
みなと人まれをみやるのみ。仏弟子をべりしを。の
ゆゑを云ふ名をたくしてゆゑ一どん界のまをうけ
く。帝王の位はいとりくゆくわづそくをすくん
と思ひしるばかりてうくなんとうのくをるまま
てはその論義のとをとりうまはしまや。法花
ぶりより言むとぶとうれはるばるて仁治三年
二月十八日ばそくゆくあるべきかぶりゆくで
やくてゐりて嘉禎三年よりいをうけ屋乃

おくく兼經桜敬すてのまゆせくうはうはまくにいまの
時代乃そくめを関白とくつまでこ三月廿六日左
乃おくく二条天のあるりぬこの多も光略
書を数乃法二条君ゆゑ。神奉用るなるもぬまい法
徳して世中初めて紀人乃も思ひわ事久
やめくぐ乃ゆ大業會乃悠紀かの法屏風に神山
かんさのしやうゐ長川くまつくきを
いあ一ゐよ名をのこゆてをとめる
こ神乃山をあきそのやう
弘基方風俗乃うこ。御出せんせん中納言りめさ
きそ利

すべて世代をかけてあつかいしられ
ものこと二ぶんなりしかれども私
面代くめぐりくわたくしまもて通宗寧相も尤
大臣位一位をくれ給ふ世むすめを后の位とり
ーされ一ぱくめくわたくしーぱくやこのころ右大臣
ときこゆるとは実氏さんわたくしまもれ御ひとあ
十八よりなりとと。世はそきまつり給ふ。九月二日
入内のぎーきありさあめなくきくとはくさまに。
母さまれかたは宮条大納言さきとうのひとあり。
女御さんさいとしたやうかあいさやうばきてめくく
ものーなくこそ。世はひくーくら
ぶらうちあひなりしさあるあ世はをしたおある
形ーぱかりーー年八月九日ぎさまれかきたち給ふ代
河どのめでくさのくだちーなり源大納言乃もあり
むちん親をすて思そのより給ふたりうんと光
てこ沢りのきくこそ人乃くちやすくーうたさいぶ
ろくきあ面白ー

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan